

# 最新イギリス短篇小説集（3）

## 「心ある人」

New British Short Story Series (3): “A Man of Soul”

恩田幸治

Koji ONDA

### Abstract

The purpose of this paper is to introduce current trends in contemporary British literature and culture.

In the first section, the short story entitled “A Man of Soul” by Rajeev Balasubramanyam is translated into Japanese. The short story was published in *New Writing 12*, the latest edition of an annual anthology of new works by not only established authors but also rising authors in the United Kingdom.

In the second section of the paper, the short story is given a critical analysis and review. “A Man of Soul” is a short story whose plot develops like a drama in some respects, and its keyword is irony.

Keywords: Irony / Drama

### < 序 >

2003 年、イギリスで *New Writing 12* が出版された。*New Writing* という本は、有名無名にかかわらず、さまざまな作家による最新の短篇小説、創作中の長篇小説の抜粋、詩、随筆など、イギリスで「新しく書かれたもの」を収録した最新イギリス文学選集で、1992 年以来毎年 1 回出版されてきた。

現代イギリスの文学のみならず風俗や文化を知る上で、この *New Writing* という選集は実に有意義な書物である。その主眼は、現代イギリスの多面性を紹介することであり、収録作品の作者たちは、国籍を問わず、イギリスで活動している作家、または、英語で創作活動をしている作家であり、それぞれの作品は時代の風潮や人々の生態を実に細かく生き生きと描き出している。

本来は、2003 年出版の *New Writing 12* から 1 篇、今年 2004 年出版の *New Writing 13* から 1 篇をそれぞれここで紹介する予定であったが、現時点では 2004 年版が未出版であるため、2003 年版のみからの紹介となる。

さて、*New Writing 12* には 41 人の作家の新作が収録されており、そのうちの 13 篇が短篇小説である。今回は、その中からラジーブ・バラスブラマニヤム (Rajeev Balasubramanyam) という作家の「心ある人」 (“A Man of Soul”) という短篇小説を取り上げ、翻訳と評論を試みる。

この短篇小説の作者ラジーブ・バラスブラマニヤムについて簡単に紹介しておこう。*New Writing 12* 巻末の著者紹介によると、ラジーブ・バラスブラマニヤムは 1974 年、イギリスのランカシャー州ランカスター市生まれの作家で、2000 年にブルームズベリー社から出版された最初の長篇小説 *In Beautiful Disguises* は 1999 年にベティ・トラスク賞 (Betty Trask Award) を受賞。現在は、第 2 の長篇小説 *The Dreamer* を執筆中。

## &lt; 翻訳 &gt;

## 心ある人

ラジーブ・パラスプラマニウム

「アジャイ、赤ちゃんができたの」

それが、彼女が言ったすべて。そこで俺は彼女にキスして、ハグして、考えた。

「さあ、これからどうすりゃいいんだ？」

前の晩に仕事を失ったばかりだった。その朝、それを打ち明けるつもりだったのに、いざ朝が来て、彼女がそんなことを言うなんて。だから、打ち明ける代わりに、何とか笑顔を作ってみせたけれど、彼女も同じく取り乱した状態だったから、俺の作り笑いには気がつかなかった。俺は2階に上がって、仕事着に着替えた。俺のオートバイは職場のピザ・ポットにあったけれど、大袈裟にヘルメットをかぶって鍵をチャラチャラと鳴らしてみせた。ピザ・ポットには給料袋も握られたままだった。窃盗で解雇。もちろん、彼女にはそんなこと言えやしない。実際、俺はやってないんだが、今じゃ、そんなこと問題じゃない。

俺たちは玄関でもう一度キスをした。彼女の目には涙、俺の目には恐怖。映画でも観ようかと考えたものの、12ポンドしかないし、仕事もないし、お腹には赤ん坊。だから、マイル・エンドをぶらぶらするだけにした。陽が落ちて寒くなると、1日乗車券を買い、地下鉄でイーリング・ブロードウェイまで行った。そこで下車することもしなかった。ただ、また戻って行くのを待った。1時間半かかった。奴らが俺をクビにしたこと、それがいかに不当であるかを考えたけれど、何よりも、これからどうやって父親になればいいのかを考えた。俺は腹が立ち、絶望し、孤独だった。周りとは言えば、田舎に屋敷があって子守もいて、今夜はどのレストランに行こうかと悩む以外に悩みはない。そんな、ピンストライプ・スーツを着た男たちばかり。ピザ・ポットなんか嫌いだし、こいつらも嫌いだ。

帰り道、『イーピング・スタンダード』紙を見つけ、バラバラとめくった。

とりわけ1つの記事が目にとまった。ひとりの男が 黒人が 2つの容疑で捕まったという。1つは、公共物の破壊。その男は防犯カメラを叩き壊した。バットで殴りかかり、メチャクチャにしたのだ。その映像から警察は男を逮捕したので、彼は言い逃れできなかったが、むかつくのは、もう1つのほうの容疑だ。なんてこった……これを人種的犯罪と見なすとは……これの一体どこが「人種的」だって言うんだ？ 相手はただの糞カメラじゃないか、まったく。

奴らの論理じゃ……あいつは黒人。あいつは腹を立てていた。だから、あいつは有罪 しかも人種的犯罪。そんな馬鹿な。もちろん、そっちの容疑は取り下げられることになった。カメラには民族性なんかありゃしないんだから。

辺りを見回すと、すでに市街地において、地下鉄電車にはスーツ姿の連中ばかりで、時折目が合うと、奴らは笑っているようだった。俺が絶望的なものを知っていて、俺がピザの宅配係だと知っていて、俺がパキ(訳者注:パキスタン人に対する蔑称)だと知っていて、それを可笑しいと思ってやがるんだ。そこで、俺は新聞記事の男について考えてみる。自分に言い聞かせる アジャイ、何をやるにせよ、とにかくちゃんとやれ。法を犯すのであれば、ちゃんと頭を使え、ただ糞カメラを叩き壊すだけじゃ駄目だ。

そして、思いついた。

リバブル・ストリート駅で降りるとして、バーに行き、トイレで待つ。利用者のうちの誰かがひとりっきりになったところで、ナイフを持っている振りをして、思い切り邪悪な表情を見せ、それからそいつの金を全部いただく。

それがプランA。

プランBとかCとかDがあるとは知らなかった。まだその時は。

今、俺はトイレにいるが、スーツ連中でいっぱいだから、プランAはうまく行きそうにない。とにかく数が多すぎるし、俺よりでかいし、俺よりも強そうだから、連中が俺を怖がるなんてあり得ない。

そこで、上の階に戻って、ドリンクを注文した。マティーニを。7ポンドで、実にまずく、それでいて高そうに見えた。

窓際に空席を見つけ、思いきり体を伸ばした。アームチェアの右手にはカップルがいて、白ワインをこぼしていた。ふたりの会話にはウンザリした。四駆の車と温室の話。男よりスーツ女のほうがいいカモだろうと思ったけれど、その思いつきは捨てた。俺もそこまで腐っちゃいないつもりだ。

ふたりの男が俺のソファァーに近づいてきたので、足をのけてスペースを作ってやった。そいつらは足を広げて座り、ソファァーの3分の2よりもはるかに多くのスペースをとりやがった。ムカついた。俺はここにおいて、片隅に小さく丸まって、ここにいさせてくれることに

対しそいつらに感謝しているも同然の状況。今ではバーにいるみんなが俺よりも大きく、前よりも大きくなっている。みんな大きくなったんだ。さらに悪いことにだ、俺は酔っ払っていたか、酔っ払いかけていた。昔からアルコールが入ると駄目だった。

そして、それは起こった……プランBが床に落ちてきた、俺の目の前に。そう……ひとりのスーツ男が財布を落としたのだ。しかも、誰ひとりとして気付かない。俺は立ち上がり、身震いし、それからグラスを空けた。アルコールが役に立った。

猫のように静かに床の上を歩いて進み、自分の鍵束を落とし、ひざまずき、左手で鍵束を、右手で財布をつかむと、両方ともズボンの両ポケットに滑り込ませた。作戦成功 方向を変えるのが嫌で、カウンターのほうに向かった。俺の計画は、しばらくぐずぐずして、腕時計を見て、それから急に走り出して、家に帰って、収穫を確認するというものだった。

が、そうはならなかった。プランCが壁によりかかって俺のことを待っていたのだ。俺のズボンのポケットにおさまった財布の持ち主であるスーツ男が、まるで動物園の猿みたいに、自分の体を叩きまくっていた。

そして金切り声で叫び始める。

「くそっ、俺の財布がどっか行っちゃった。財布をなくしちゃったぜ」

奴の連れが奴を落ち着かせようとするが、奴は落ち着きたくなんかない。もっとも、奴にいっぱいおごってやろうと言う人もいない。

「おまけに、どっかのマヌケのものになるんだろうよ。そうさ。どっかのマヌケのものにな」

こんなアホどもを憎むなというのは、無理な話だ、と俺は独り言。奴らはお互いに憎み合ってるし、自分たち自身を憎んでいる。奴らにとっちゃ、隣りにいる奴はいつだってマヌケなんだ。無理もない。

探してみると奴の仲間たちが言うが、奴は聞く耳を持たない。さっきまでいた場所の床にまだあるかもしれないとは思えない。奴はすっかり興奮してしまっているのだから、その場を去っていく。それで終わり。

俺もその場を離れる。プランC。

奴の家まで後をついていき、ドアをノックしてやろう。それから言ってやるんだ、「やあ、君が財布を落とすのを見て、その中に君の住所があったもんだからさ(見ても構わなかったよね?)はいどうぞ」と。そしたら、奴は言うはずだ、「ああ、君はなんて立派な人間なんだ。君のような人たちの前では赤面してしまうよ。自分たちが野蛮人に思えてくるからな、まったく。さあさあ、中に入って、生きるコツを教えてくれよ。そして俺は中に入って、その糞垂れの全身に豪華絢爛たる光輝を降り注いでやるのさ……そして俺様がいなくなると、奴は惨めになり、俺は……？」

俺はうちに帰って、プリーティに話すのさ。何があるかと、俺たちは神の子のようにこの地上を歩き回ろう。そう彼女に言うのさ。俺たちの子供は誇りにあふれ、背が高く、戦士であり、愛する人であり、そして聖者なのだ。そして、今でも俺がずっと昔に彼女の心を溶かした男であるということ、彼女は改めて知るだろう。力強く、正しく、くだらない物質や肉体などを超越した存在。礼節の人。道徳の人。心ある人。

そこで、俺はその嫌な奴の跡をつける。いとも簡単だ。奴がタクシーに飛び乗ったらどうしようかと心配したが、それはないようだ。奴は速足で歩き、自分が唯一気にかけているモノを手に入れたマヌケに対して悪態をついている。

奴の家はスピタフィールドの近くで、そこもまた急速にヤッピーたちの住処になりつつあるところで、奴の住む建物は本来なら王子様が住むべきなのに、王子様は住んでいない、そんな建物だ。

奴が中に入ると、俺はすぐ後から中に滑り込む。ドアマンが俺の胸に手を当てて止めるだろうと半ば覚悟していたけれど、目に入ったのは1列に並んだ郵便受けだけで、小綺麗に番号が付けられ、手紙がたくさん入っている。奴は郵便物を取り出そうとするが、気が変わったようで、あまりにもうんざりしていたのだ。イライラした子供みたく跳ねるようにして階段を上がっていく。俺は、足元に薔薇の花びらがあるかのように、後についていく。

扉が閉じてカチャンと音を立てるのが聞こえ、数分待ってからノックをする。奴はマジギレの様子だ。俺が口を開く間もなく、糞ピザなんぞ頼んじゃいねえぞと奴は言う。確かにそう言ったのだ、「糞ピザなんぞ」と。俺はぐっとこらえ、財布を奴に渡す。が、うまく言葉が出てこない。焦ってしまい、もごもごとつぶやく。緊張した時のいつもの癖だ。財布を受け取りながら、奴の目がぱっと輝き、そして……俺は待っているのだが……待ちぼうけ。奴にしてみれば、俺なんかが消え失せろということか。必要なものは手に入ったんだから。

俺は奴の召し使いだ。配達屋だ。今日は財布を届け、明日はチーズ多目のアンチョビ・ピザ。ピザの配達人……植民地出身の財布係か。

俺は奴の後について中に入る。奴は驚いた様子だが、どうしようもあるまい。自分の自堕落で腐った生活に俺が最高の瞬間を与えてやったのだから、俺を追い払うなんてできっこない。

そこで奴は何をしたと思う？ 奴は自分のためにビールを注ぎ、俺のほうには目もくれない。何にも出してくれやしない。水さえも。その状況に俺は屈辱で体を震わせて立ちすくんだが、奴は気付かさえない。奴はTVをつけ、自分だけビールを飲み、俺が立ち去るのを待っている。そこで俺は腰をおろす。

電話が鳴り、奴は立ち上がり、ジェレミーとか何とかという奴と株式市場について話し出す。そこで俺は立ち上がり、キッチンに行き、自分で糞ビールを取り出す。それから考える ついでに、家の中を見物してやろう。こんな所は初めてなんだから。

それから俺はアパートの中をうろつき回るのだが、やっぱりそうさ、金の匂いがブンブンする。最後に寝室で足を止め、刀を頭上に振りかざす裸の女の絵を眺め、化粧テーブルに目をやり、ピタッ……大当たりだ。ブランド。

鏡台の上には金のプレスレットがある。しかも、ダイヤモンドが散りばめられている。かなり大きい。あいつ(奴は名乗らなかった)はまだ電話で話中だ。俺は考える 考えるな、やれ。そして俺はそのプレスレットを手に取り、それにキスをし、ポケットにしまう。

汗が吹き出てくる。ズボンのポケットの中でプレスレットの輪郭が浮き出てないか確かめてみる。大丈夫だ。それからリビング・ルームに戻る。電話はもう終わっていたので、もう帰ると俺が言うと、奴は嬉しそう。下司野郎め。

しかし、ちょうど立ち去ろうとしたところに、ドアが開き、奴の奥さんが入ってくる。しかも、驚くなけれ……彼女はアジア人だった。まさか糞アジア人だとは。そして、彼女は、その一、魅力的で、王女みたいで、髪は長く、目はぱっちり大きく、しかもいい体ときた(気になったわけじゃない。プリーティにはそんなこと言わないし) 彼女が自己紹介するので、俺は何か起きたのかを彼女に説明すると、「お茶でもどうですか」と言ってくれる。

俺はまるでバカみたいに慌てふためき、ドギマギし、もごもご言うと、彼女は、コーヒー？ ビール？ 何か食べ物？ と訊いてくれるので、やっとのことで紅茶を頼む。彼女が奴のほうを見ると、奴、つまり、マヌケ野郎は紅茶の用意をしに向こうへ行くが、内心悪態をついているはず。少なくとも彼女がズボンでよかった、いや、そのつまり、そもそも彼女みたいな素晴らしい女性の結婚相手が、なんであんな、あんな……？ 吐き気がするぜ。奴の顔にはこう書いてあった 「俺様を見ろ。心は醜い糞野郎でも、前途は洋々で、おまけにこんなにゴージャスなパキの妻がいて、お前にはどうしようもないのさ」

毛が逆立つぜ。怒りで血が沸き立つのを感じるが、この子は本当に可愛くて、すごく優しいから、一緒にいて楽しい。映画、両親のこと、それから食べ物について少し話していると、紅茶がやってくる。奴をにらみつけてやると、奴はバスルームに消え失せる。内心俺は思う 「アジャイよ、この子は可哀想だ。自分を理解してくれる男が必要なのに、こんな奴のところに戻ってくるしかないなんて」

憤りは感じない。ただ悲しい。この子は俺と同じだから、彼女には幸せになってもらいたい。なのに、彼女は惨めな思いをしていて、俺にはそれが感じ取れる。が、少なくとも俺は彼女と通じ合える。だから、彼女には少なくとも理解者がいるわけだ。いつかうちに来て妻のプリーティに会ってください(「できれば、あのアホは連れてこないで」と目で訴えながら)と彼女に言った途端、俺は思い出した。

この可哀想な子のプレスレットが俺のポケットに入っているじゃないか。そうだ、そうなんだ。それは彼女が母親からもらったんだ。それが彼女のすべて。彼女にとってはそれが世界を意味するんだから、どうしたって盗むなんてできない。絶対に。

だから、今度はそのプレスレットをポケットから取り出して彼女に返さなければ。簡単なことではなさそうだ。彼女は俺をじっと見ながら、まるで子供みたいな声でお喋りをし、そのひと言ひと言が露の雫のように空中に浮かんで、俺の心に落ちて、酸に変わる。俺はその痛みにも身悶えしたから、数分して、「大丈夫？ 何か飲む？」と彼女が訊いてきたのも無理はない。「いえ」と答えてから、「ええ」と答えるべきだったと気付いたが、後の祭りだ。彼女の目に留まりそうなところにこの厄介なプレスレットを落とせるよう、何が何でも彼女を部屋から出さねば。

今や、俺は駱駝のように汗をかいている。目はかっと思開いている。とてもまともには見えないのは分かっているが、どうしようもない。彼女が言っていることを聴き取ろうとしても、今ではただの言葉の塊で、単語の1つ1つがまた俺をいっそうひどい状態にするばかり。

ようやくポケットから例のものをゆっくりと取り出すことに成功し、それを手に隠し持つ。彼女はまだ喋り続けていて、俺は微笑んだり頷いたりしながら、ソファ用クッションの下にそれを滑り込ませていく。しかし、指は汗だらけだったので、まるで夢の中で罨にかかったかのように、それは床に落ち、カーペットの上を横切り、彼女の足元で止まる。

プレスレットは今、彼女の足のすぐ脇に横たわり、俺を見てニヤニヤ笑っている。でも彼女は気付かない。俺はじっと見詰める。まるで何時間も経ったかのような。ふと我に返って、「水をもらえますか」と言う。彼女は微笑んで言う、「ええ、あなた、具合が悪そうなもの」。そこで、俺はインフルエンザがどうのこうの言って、彼女はキッチンへ。

俺はプレスレットに跳びかかり、それから部屋の真ん中に立ち、それをどこに置こうか思案する。キョロキョロ見回していると、サイドボードの上にある花瓶が目に入る。そこに近づいていき、それから考える。

「でも、彼女がそれに気付くまでに何ヶ月もかかってしまったら？」

可哀想なあの子は、心配のあまり寝込んでしまうだろう。だから、寝室に戻ることにし、プレスレットを手中でぐるぐる回していたら、いつのまにか、彼女が部屋に戻ってきていた、俺の水を持って。

俺は水を顔にこすりつけ、残りは一気に飲み干す。彼女はものすごく心配そうに俺を見ていて、俺は泣きたい気分になる。全世界が俺を憎んでいるんだ。いや、もっとひどい。俺が俺自身を憎んでいる。無理もない。が、その時、いい考えが浮かぶ。

「ねえ、もう行かなくちゃ。でもその前にトイレを借りてもいいかな」

そして考える、プレスレットは洗面台に置いとけばいいさ。ビザみたいに簡単だ。

でも、信じられるかい？ あのデブ野郎がまだバスルームにいやがった。どれくらいかかりそうなのと彼女が訊くと、いらついた馬鹿のように、奴は言う。

「分からんよ。いま入ったばかりだろ？」

俺は微笑む。そして言う。

「まあ、気にしないで。そこらへんのパブにでも入るよ」

彼女は本当に申し訳なさそう。それから俺たちはハグをする。しっかりとハグを。しかも一瞬、恐ろしいことに、彼女を放してたまるかと考えてしまう。俺は彼女をぎゅっとぎゅっと抱きしめ、目が涙でいっぱいになるけれど、彼女が緊張しはじめているのに気づき、彼女を放し、涙を拭き、そして立ち去る。

ドアが背後で閉まる。目を閉じ、壁にもたれかかってから、階段を降りる。一番下の階まで辿り着くと、そこにはブランエ。

郵便受けだ。どうしてもっと早く思いつかなかったんだらう？ それぞれの部屋に1つずつ。どれも開いたまま。というよりも、ただのトレイだ。彼女たちの郵便受けをすぐに見つけ、永遠の自己嫌悪から救われたことに感謝。もっとも、ほんとプレスレットをそこに落とすのはためらわれた。バスタブに浸かっているあのアホがいかにも言いそうなことだが、「どこかのマヌケ野郎に盗まれちまうだろう」。そこで、俺は封筒を1つ取ると、人差し指で破って開け、その中にプレスレットを落とす。と、その時、中の手紙の文字が見えたので取り出して読んでみる。それは、家主からだ。

「最近、郵便物の盗難が相次いでいますので、玄関の上に有線方式のTVカメラを設置しました。不便をかけますがご容赦ください。」

俺は振り返って見る。確かにカメラがそこにあり、硬く冷笑的で、白く冷たく、その光る目で俺を見つめている。俺は見つめ返し、世の中を憎み、そのテープを見て俺を泥棒だと思うであろうアホを憎む。俺は拳を握り締め、目を瞑る。目を開けると、世界は赤い。まるで血に浸っているかのよう。

ドア近くの隅っこに消火器がある。俺はそこに歩いていき、それを頭上に持ち上げ、そのTVカメラの側面に4回、いや5回だったかもしれない、叩きつける。カメラは壁から剥がれ、落ちていく。それは壊れた目で俺を見つめ、あざ笑っている。俺はブーツを履いた足を上げると、そのカメラの醜い頭を踏みつけ、塵以外には何も残らなくなるまで何度も何度も踏んづける。

目に見えぬ観衆に向かってお辞儀をすると、俺はドアを開け、その建物から立ち去った。

## &lt; 評論 &gt;

この物語の語り手である主人公はアジャイという名のパキスタン人 (“paki”) である。あるいは、親がパキスタン出身で、本人の生まれ育ちはイギリスなのかもしれない。<序>で触れたように、作者のラジーブ・バラスプラマニウムはイギリスのランカスター生まれではあるが、その名前とこの物語の内容から察すると、やはりアジア系、おそらくは主人公と同じパキスタン系であろう。主人公が男のアパートで出会う女性もパキスタン系であり (“paki bird”)、彼の妻ブリーティもまた同様のバックグラウンドの持ち主かもしれない。ちなみに、イギリスの文学界でも有名なサルマン・ラシュディやハニフ・クレイシもパキスタン出身の作家である。

イギリスが移民の多い国というのはよく知られている。特にこの物語の舞台にもなっている首都ロンドンは、永住移民の他、観光客や留学生など、数多くの非イギリス人がいる国際都市であるのもまた言うまでもない。また、「アメリカというと、『移民の国』というイメージが強いが、アメリカでは外国で生まれてアメリカ国籍をもっている者が全人口に占める比率が6パーセントであるのに対して、イギリスでは8パーセントである」(加瀬英明『イギリス 衰亡しない伝統国家』p. 199)。

第2次世界大戦後、イギリスはヨーロッパからの労働者や難民を多く受け容れてきたが、1950年代から60年代にかけて多く渡英したのが南アジア インドやパキスタン、バングラデシュの人々である。その後も南アジア出身の移民は増えつづけ、1990年代にはマイノリティー全体の半分を占めるようになり、その中で最大の割合を占めるのがインド人とパキスタン人なのである。

移民が増えると避けられないのが人種差別問題であろう。イギリスにも当然、人種差別はある。日本人を含めたアジア人の差別問題の実態については、渡辺幸一『イエロー 差別される日本人』(栄光出版社)に詳しく、パキスタン人の青年が巻き込まれた事件も取り上げられているが(同書 pp. 102-107) この「心ある人」という短篇小説の主人公アジャイも差別的待遇を受けていると思われる。主人公の言い分に嘘偽りがないのであれば、実際には盗みを働いていないのに解雇されたというのは紛れもなく「不当」な扱いである。

また、電車の中での主人公の心理 「辺りを見回すと、すでに市街地にて、地下鉄電車にはスーツ姿の連中ばかりで、時折目が合うと、奴らは笑っているようだった。俺が絶望的なものを知っていて、俺がピザの宅配係だと知っていて、俺がパキだと知っていて、それを可笑しいと思ってやがるんだ。」 は、彼の被害妄想だと切り捨てることもできるかもしれないが、あるいは、ふだんから差別的待遇を受けているゆえの心理かもしれない。

ちなみに、「パキ」(原文では “paki”) という語は、パキスタン人、パキスタン系英国移民を指し、『グランドコンサイス英和辞典』(三省堂)には「パキ野郎」という訳語も載っている他、“Paki bashing”(パキスタン人たたき、南アジア系住民へのいじめ=英国の人種差別主義者自身による侮蔑的用語法)という語句も掲載されている。

主人公の心理が被差別の実体験から生まれてきた被害者意識なのか、単なる被害妄想なのか、それとも、仕事を解雇されたことで自暴自棄で厭世的な気分になっているのか、いずれにせよ、この物語は「悪態」(“cursing”)に満ちている。原文には fucking, fuckin, fucker(s), damn, motherfucker, bastard, idiots, wanker, wanka, twat, cunt などの罵り言葉、汚い言葉が頻出し、それらひとつひとつのニュアンス(の違い)を訳出するのは困難であったが、それらはすべて物語の語り手である主人公や財布を落とした男の人柄や気分を表わしていると思われる。

主人公の悪意は、他人から金を巻き上げようという「プランA」やプレスレットを盗もうとする「プランD」に如実にあらわれている。主人公は、男が落とした財布を彼の自宅に届けたり、一度は盗んだプレスレットを何とかして返そうとしたりはするものの、果たして彼を「心ある人」と呼べるだろうか。そう、皮肉なことに、この物語の題名は「心ある人」なのである。しかし、主人公の言動や心理を見せ付けられた読者は、彼を本当に「心ある人」と見なすだろうか？ 善意や親切心のある主人公を「心ない人」と呼ぶのは酷だとしても、彼を「力強く、正しく、くだらない物質や肉体などを超越した存在」あるいは「礼節の人。道徳の人。心ある人」と呼ぶのは誰もが躊躇するのではないだろうか。

「皮肉」 それは、この物語のキーワードの1つである。この物語は悪意や悪態に満ちているばかりではなく、皮肉にも満ちている。

物語の冒頭からしてそうである。主人公は前日に仕事を首になり、それを妻に打ち明けようとした朝、妻に懐妊を告げられ、「さあ、これからどうすりゃいいんだ？」という皮肉な状況に陥る。

また、行く当てもなく辿り着いたバーでは、誰かから金を巻き上げてやるうともくろみながら、客はみな「俺よりでかいし、俺よりも強そうだから、連中が俺を怖がるなんてあり得ない」という状況も皮肉であり滑稽である。

偶然、ある男が財布を落とすのを目撃し、それを拾った主人公は男の跡をつけ、男の家に行って財布を渡すが、自分が相手に「豪華絢爛たる光輝を降り注いでやる」ことになるはずだと想像していた主人公は、何とも皮肉なことに、感謝されて手厚く歓迎されるどころか、無視され、「屈辱で体を震わせ」る羽目になるのである。

さらに、その男の妻が登場することによって、皮肉はいっそ

う深まる。冷遇された主人公はその男への嫌悪感を募らせるが、そこに現われた彼の妻が自分と同じパキスタン人であることが判明し、その女性に好意を抱けば抱くほど、男への憎悪と軽蔑ゆえ、主人公は遣り切れない気持ちになり、皮肉は深化するのである。

このように、主人公の思惑や計画はことごとく外れるという、まさに皮肉の連続であるが、皮肉のクライマックスは物語の最後の場面である。自分が電車の中で読んだ新聞記事の事件の犯人である黒人に同情しながら、その男と同様の罪を犯してしまう主人公。しかも、確かに一度はプレスレットを盗んだものの、それを何とかして返そうと躍起になった挙げ句の行いが犯罪と誤解される可能性が生まれ、それを消したくて防犯カメラを襲ってしまう。電車の中では「アジャイ、何をするにせよ、とにかくちゃんとやれ。法を犯すのであれば、ちゃんと頭を使え、ただ糞カメラを叩き壊すだけじゃ駄目だ」と自分に言い聞かせていたのにもかかわらず、この場面の主人公は「ちゃんと頭を使え」ず、「ただ糞カメラを叩き壊すだけ」なのである。すっかり理性を失っている主人公にとって、「まるで血に浸っているかのように」「世界は赤い」のである。

主人公が防犯カメラを叩き壊そうと消火器を振り上げる姿は、彼がアパートの寝室で目にした「刀を頭上に振りかざす裸の女の絵」を想起させはしないだろうか。女の足元に転がったプレスレットが彼を見て「ニヤニヤ笑って」いたのと同じように、この場面では、床に落ちた防犯カメラが彼を見て「あざ笑って」いる。電車の乗客たちに馬鹿にされているように感じたばかりでなく、無機物である物体にまで嘲笑されているように感じるのは、主人公の被害妄想と言えよう。その防犯カメラを踏んで粉々にした後、主人公はその場を去っていくのであるが、その様子「目に見えぬ観衆に向かってお辞儀をすると、俺はドアを開け、その建物から立ち去った」は極めて印象的であり、異様ですらある。まるで、舞台の上で演技をしていた主演俳優が退場していくかのような光景であり、とても芝居がかった所作であると言えよう。それは、犯罪の現場を目撃された犯人の開き直りに近いのかもしれないが(防犯カメラは「有線方式」であるがゆえ、カメラ本体を破壊したところで証拠の映像は残るはずである)、実は、主人公の演技はこの閉幕場面だけに見られるわけではない。

遡って閉幕場面 物語の冒頭 を見てみよう。妻の懐妊を知った主人公は、愕然としながらも「何とか笑顔を作ってみせた」後、前日に職を失ったことも隠したまま、「大袈裟にヘルメットをかぶって鍵をチャラチャラと鳴らしてみせ」、仕事に出かける振りをし、さらに電車の中では「ナイフを持っている振りをし、思い切り邪悪な表情を見せ」てやろうと考えていたではないか。まさに演技だらけである。(ちなみに、興味深いことに、この物語の作者の処女長篇小説 *In Beautiful Disguises*

の題名の“disguise”という単語は「変装」や「見せかけ」、「ごまかし」を意味する。)

また、主人公が自分のしようとする行動に「プランA」、「プランB」……と次々と名付けるのも、妙に芝居がかったはいないだろうか。また、「プランBが床に落ちてきた、俺の目の前に」や「プランCが壁によりかかって俺のことを待っていたのだ」といった無生物の擬人化も、ある意味、自己劇化の一種であると思われる。

さらに、「猫のように静かに床の上を歩いて」みたり、「駱駝のように汗をかいて」みたりといった具合に、主人公は「猫」になったり「駱駝」になったり忙しいが、そのように自分自身を動物にたとえる比喻もまた自己劇化の一種と言えよう。

職場で不当な扱いを受け、マイノリティーとして差別的待遇を受け、被害者意識や被害妄想を胸に抱き、自暴自棄になっている主人公は自己を劇化し、自分を「悲劇の主人公」のように感じているのかもしれない。たとえば、物語終盤の「全世界が俺を憎んでいるんだ」という誇大な被害妄想や「俺は世の中を憎む」という強烈な呪詛は、いかにも悲劇の主人公に相応しい台詞ではないか。

財布を届けたにもかかわらず男から無視された時、彼がもしシェイクスピアの悲劇『アテネのタイモン』を知っていれば、きっと劇中の「ああ、恩知らずの形をとって現われる時の人間ほど恐ろしい化け物はない！」(第3幕第2場)という台詞を思い浮かべたであろう。あるいは、シェイクスピアの『お気に召すまま』の中のあの余りにも有名な台詞「この世界はすべてこれひとつの舞台、人間は男女を問わずすべてこれ役者にすぎぬ」(第2幕第7場)を、この物語の主人公は知っていただろうか。

なお、この物語は場面ごとに行間が広く空けられることによって(原文ではその広い行間に星印が置かれている)6部構成になっている。劇で言えば、6幕からなる芝居と言えよう。注目すべきは、この物語の文体である。翻訳の文体にも反映させたが、第1幕の語りの動詞は過去形であるのに対し、第2幕からは一転、過去形と現在形が混在するようになり、さらに第3幕からはほぼ現在形と現在進行形が用いられている。現在形や現在進行形を用いることで、作者は臨場感を生み出すことに成功していると言えよう。われわれ読者あるいは観客は主人公の行動を目の当たりにし、その心理状態を覗き込んでいるような気になるのである。

そして、最終幕の1行「目に見えぬ観衆に向かってお辞儀をすると、俺はドアを開け、その建物から立ち去った」で、再び文体は過去形に戻る。まるで、我を忘れていた主人公が我に返ったかのように。そして、すべてが完結したかのように。主人公の人生もこれで終わり、一巻の終わりである。

否、再びシェイクスピアの『お気に召すまま』から引用する

と、「この広大な世界という舞台の上では、われわれがいま演じている場よりもはるかに悲惨な芝居が演じられているのだ」と作者は言いたいのかも知れない。確かに、この物語の主人公は皮肉と悲慘に満ちた1日を過ごし、第5幕では、自分が同情した新聞記事の黒人と同じ罪を犯してしまうという皮肉のクライマックスを迎え、もはや青天白日の心境であるはずはないが、それでいて、その直後の彼の退場の仕方は妙に飄々とした、あるいは颯爽とした印象すら与えはしないだろうか。それは、先に触れたように、ただの開き直りかも知れないが、その退場の仕方を見ていると、この物語の結末には遣り切れない悲壮感はありません、ただ微妙な皮肉の味が残るだけである。

以上論じてきたように、この短篇小説は皮肉に満ちた芝居のような物語であるが、閉幕の後にも皮肉は続くかも知れない。防犯カメラに収められてしまった主人公は、後日、逮捕されるかも知れないのである。これから父親になるはずなのに。地下鉄の電車の中で「これからどうやって父親になればいいのか」考えていたのに。退場後、閉じた幕の向こう側で、彼は物語冒頭とまったく同じ台詞をつぶやくかも知れない。「さあ、これからどうすりゃいいんだ?」と。

(提出期日 平成16年11月26日)